

国際的格差領域

浜野 隆（お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科）

1. 研究プロジェクト

①「幼児期における読み書き能力の獲得過程とその環境要因の影響に関する国際比較研究」

幼児期のリテラシー（読み書き能力）の習得は子どもの認知発達と強い関連がある。また語彙能力は知能発達や学力適応度の指標になることが明らかにされてきた(内田,1989; 2007; 東他,1995)。リテラシー習得に社会文化的要因はどのような影響を及ぼしているかについて明らかにする目的で、お茶の水女子大学グローバル COE「格差センシティブな人間発達科学の創成拠点」ではリテラシー習得の国際比較調査（日本、中国、韓国、ベトナム、モンゴル）を推進中である。

現在までの進捗状況は次の通りである。まず、日本、韓国、中国では、幼児期の調査とデータ分析は完了した。日本調査は報告書を作成した。来年3月までに、3カ国を比較するための日韓中比較報告書を日本語・韓国語・中国語で作成する。また、幼児5歳児の小学1年時の PISA 型読解力と語彙力の到達度調査を実施中である。モンゴルとベトナムでは保護者調査を推進中であり、12月末に調査を完了する予定である。具体的な調査結果を示すために、本稿の最後に日本の結果を詳しく紹介している。

②「養育環境が親子のQOLと子どもの心身の健康と発達に及ぼす影響に関する国際比較研究」

調査対象各国（日本、中国、ベトナム、タイ）における調査地域の選定と、質問紙の策定が終了し、日本においてプレテストを施行した。調査地域であるメコンデルタのビンロン市の現地視察、タイ、中国の研究協力者との最終打ち合わせのために、ベトナム、タイ、中国を訪問した。ビンロン市立病院では、質問紙調査の対象となる子どもたちのうち、質問紙調査でスクリーニングされた注意欠陥多動性障害の特徴を持つ子どもたちの診察も行った。また研究テーマの一つである発達障害について、ベトナムのホーチミン医科薬科大学で、現地医師を対象に講演を行った。

また、これと平行して、スリランカの青少年の健康行動の心理社会的規定因に関する研究を進めている。青年期の健康危険行動は、特に、この時期に特徴的な仲間からの圧力、低い

自尊感情が関連しているとされている。スリランカは、アジア諸国において日本について識字率が高いとされているが、青年期の問題行動や健康行動に関する心理学的なアプローチによる研究は希少である。本研究では、スリランカの青少年を対象に、健康行動（健康危険行動および健康促進行動）と発達段階に特徴的な心理社会的要因について明らかにすることを目的としている。2009年度は、これまでに、調査に用いる尺度のバックトランスレーション（ドイツ語⇔シンハラ語）および調査デザインの立案を行った。年度末にかけて現地で調査によるデータ収集を終了させる予定である。

③「中西部アフリカを対象とした幼児教育の国際協力プロジェクトの実施・インパクト評価」

乳幼児期は脳や知覚、社会性が発達し、初等教育を含むその後の学校生活や人生についても重要な時期である。1990年に「万人のための教育世界会議」で採択された「万人のための教育（EFA: Education For All）宣言」においては、基礎教育の一部として幼児期のケアや就学前教育が含まれることが明記された。その後、EFAの方向性を検討するために開催された2000年の「世界教育フォーラム」で採択された「ダカール行動枠組み」においても、第一番目の目標として就学前保育・教育の拡大と改善が掲げられている。しかしながら、途上国にはECDを専門とする人材が不足しており、ECDの発展は未だ十分とはいえない。特に、サブサハラアフリカ諸国においては、ECDの重要性が十分認識されておらず、ECDの整備・普及を図るための人材育成と能力向上を行う必要性が高まっている。このプロジェクトは、JICAとの連携により実施している中西部アフリカ幼児教育研修が各国の幼児教育普及改善や格差問題への取り組みに対していかなるインパクトを与えたかを評価するものである。2009年度は9月から10月にかけて5カ国12名の幼児教育行政官等を対象に研修を実施し、研修効果に関する質問紙調査を行なった。

2. 実施したセミナー・シンポジウム

平成21年度

①平成21年4月30日（於：お茶の水女子大学）、GCOE国際セミナー「幼児期の言葉の発達の連続性を理解する」、【主な招待講演者】ニチャラ・ルアングダラガノン氏（タイ、マヒドン大学医学部小児科准教授）

②平成21年6月1日（於：お茶の水女子大学）、GCOE国際セミナー「ベトナムにおける

幼児教育の格差」、【主な招待講演者】 Le Thi Thanh Thuy（ハノイ国立教育大学准教授）、Dang Hong Phuong（ハノイ国立教育大学講師）

③平成 21 年 6 月 9 日（於：お茶の水女子大学）、GCOE 国際セミナー「教育評価の新たな取り組み：学校・生徒に関する調査結果を、どのように学校教育の方針や学習環境の改善に反映させるか」、【主な招待講演者】ダグラス・ウィルムス（カナダ、ニューブランズウィック大学教授・社会政策研究所所長）。

④平成 21 年 6 月 11 日（於：お茶の水女子大学）、GCOE 国際セミナー「階層線系モデル（HLM）ワークショップ」、【主な招待講演者】ダグラス・ウィルムス（カナダ、ニューブランズウィック大学教授・社会政策研究所所長）。

⑤平成 21 年 10 月 2 日（於：お茶の水女子大学）、GCOE 国際セミナー「中西部アフリカの子ども・幼児教育にみる格差」、【主な招待講演者】Mr. ZAMANE Bienvenu, Mr. KIEMDE Athanase Touyaoba Yam, Ms. MAMAT Madeleine Daiferle, Ms. NGO NSONGA Aline Joséphine ほか。

⑥平成 21 年 10 月 20 日（於：お茶の水女子大学）、GCOE 国際セミナー「中西部アフリカ幼児教育改善アクションプラン」（2009 年 10 月 20 日）、【主な招待講演者】Ms. DAOUDA GAYAKOYE Djibo Mamata, Ms. DIAFAROU Fatima Tagaza, Ms. BEGNA Rekia, Mr. YORO Souleymane, Mr. FAYE Edouard, Mr. DIOP Cheikh Yaba ほか。

3. 研究成果の具体例：

「幼児期における読み書き能力の獲得過程とその環境要因の影響に関する国際比較研究」 における日本調査の概要

〔目的〕 第 1 に 1995 年調査と比較し、第 2 に、子どものリテラシーや語彙力に社会経済的要因や家庭の教育投資額がどのような影響を及ぼしているか、第 3 に、しつけスタイルや SDQ 尺度によって測定された親の子どもへの敏感性と向社会性評価がリテラシーや語彙力とどのように関連しているかを明らかにすることを目的とする。

〔方法〕 1. 幼児臨床面接調査、2. 保護者アンケート調査、3. 保育者アンケート調査からなる。

1. 幼児調査：3 歳児 773 名、4 歳児 914 名、5 歳児 920 名、合計 2607 名を対象にして、個別に臨床面接を実施し、1)読み書き能力、2)音韻的意識、3)絵画語彙検査、4)アルファベット・リテラシーを測定した。さらに、5)リテラシーの道具的価値への気づきについて、個

別に臨床面接を実施した。

2. 保護者調査：対象児の保護者 1780 名を対象にして、子ども観、早期教育への取り組み、子どもの向社会性、しつけスタイル、家庭の蔵書数、教育投資額、収入等についてアンケート調査を実施した。

3. 保育者調査：対象児が通園している保育所・幼稚園の保育者 193 名を対象にして幼児期の文字教育、保育形態、保育環境の設定、子どもへの関わり方などについてアンケート調査を実施した。

[結果]

I. リテラシー習得に及ぼす経済格差の影響；

幼児のリテラシー習得と家庭環境・保育環境との関連についての主な結果は次の通りである。

第1に、1995年調査に比べて、リテラシー習得が早期化（5歳児 48%→80%）した。

第2に、リテラシーは3,4歳児では性差（女>男； $p<.0001$ ）が見られるが、5歳になると性差はなくなる。語彙力は4,5歳児で性差（男>女； $p<.0001$ ）が見られる。

第3に、リテラシーは経済格差（CP=700万円）の影響が見られ（ $p<.0001$ ）、特に4歳まで顕著である。語彙力は、加齢に伴い経済格差の影響が顕在化し、5歳児では差が最も大きくなる（ $p<.0001$ ）。

第4に、保育形態（一斉保育か子ども中心主義保育か）によって、語彙能力に差が見られ（ $p<.0001$ ）、自由保育の場合に語彙能力が高い。

第5に、共分散構造分析により、リテラシーの習得については3,4歳児までは、経済格差要因（家庭の経済格差、教育投資額差）、親の学歴、家庭の蔵書数、しつけスタイルの影響を受けるが、5歳児では、経済格差要因の影響はなくなると明らかになった。

第6に、清音の音韻的意識（内因）は5歳児で天井になり、リテラシー習得の教授効果（外因；一斉保育や早期のドリル学習など）を顕在化させる。

第7にしつけスタイルは「共有型」・「強制型」・「自己犠牲型」の3因子が抽出された。強制型は低所得層に多く、共有型は高所得層に多い。子どもとおなじ目線に立つ共有型しつけスタイルはSDQ尺度の向社会性の発達と強い関係があることが明らかになった。子どもと対等に楽しい経験を共有するような親の関わりが将来のよい対人関係やコミュニケーション能力の発達に資することが期待される。

II. 語彙力（＝学力基盤力）の習得としつけスタイルの関係についての詳細な分析；

1. しつけスタイルの分類

しつけスタイル尺度について因子分析を行ったところ、「共有型」（ふれあいを重視し、子どもとの体験を享受・共有する）・「強制型」（大人中心のトップダウンのしつけや力のしつけ）・「自己犠牲型」（子どもが何より大切に、子育て負担感が大きい。育児不安か放任に二極化）の3因子が抽出された。

3つのしつけスタイルのうち、最も標準化得点の高いしつけスタイルに個人を振り分けた。その結果、共有型 33.4%(573名)、強制型 35.6%(612名)、自己犠牲型 31.0%(532名)とほぼ均等に分類された。

2. しつけスタイルと語彙・読み・書きの関連

それぞれの得点について分散分析を行った結果、読み・書きではしつけスタイルによる差はあらわれなかったが、語彙においてしつけスタイルの主効果が有意で ($F(2,1708)=11.16$, $p<.0001$)、強制型よりも共有型において語彙の得点が高いと明らかになった (Tukey 法: $p<.01$)。

3. リテラシーと語彙の規定要因に関する重回帰分析

読み・書き・語彙に影響する要因について重回帰分析を行った結果、子どもの年齢、性別、母学歴、収入は全ての得点に対して有意な関連が見られた。強制型と共有型しつけについては、語彙にのみ関連が見られた (Table1)。さらに分析を行ったところ、語彙得点に対する収入×強制型の交互作用が有意だった ($\beta = .05$, $p<.05$)。強制型しつけの影響は、収入低群では認められたが ($\beta = -.10$, $p<.05$)、収入高群では認められなかった ($\beta = .01$, $p=.70$)。収入×共有型の交互作用は有意ではなかった ($\beta = .01$, $p=.63$)。

Table1 リテラシーと語彙の規定要因に関する重回帰分析

	語彙得点		読み得点		書き得点	
	β	r	B	r	β	r
子どもの年齢	.61 ***	.60 ***	.55 ***	.55 ***	.71 ***	.71 ***
子どもの性別	-.08 ***	-.08 **	.08 ***	.08 ***	.13 ***	.12 ***
収入	.06 **	.12 ***	.09 ***	.13 ***	.07 ***	.10 ***
母学歴	.12 ***	.11 ***	.08 ***	.07 **	.04 *	.01 <i>n.s.</i>
強制型しつけ	-.05 **	-.04 *	-.03 <i>n.s.</i>	-.02 <i>n.s.</i>	.01 <i>n.s.</i>	.03 <i>n.s.</i>
共有型しつけ	.05 **	.05 *	-.01 <i>n.s.</i>	-.01 <i>n.s.</i>	.02 <i>n.s.</i>	.02 <i>n.s.</i>
R^2	0.4		0.33		0.52	

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

[考察]

リテラシーは5歳になると経済格差や性差要因の影響がみられなくなるが、語彙力(学力基盤力の指標)は加齢に伴い経済格差要因の影響が顕在化する。また、しつけスタイルや家庭の蔵書数も語彙力と強い正の関連をもっている。

収入低群で、なおかつ強制型しつけの傾向が高い場合に語彙得点が有意に低下することが確認された。特に注目されるのは、低収入層であっても、共有型しつけスタイルをとれば、語彙能力は低下しないという点である。しつけスタイルは親が子どもへの関わり方を変えることにより、制御可能である。

以上より、大人が子どもと対等な関係で触れ合いを重視し、楽しい体験を共有する家庭の子どもの語彙力が豊かになることが示唆された。

家族で団欒や会話を楽しむ雰囲気の中で子どもは内発的な知的好奇心を発揮して環境探索を行い主体的に学んでいるのであろう。